

Lao People's Democratic Republic

EARTH GALLERY Vol.117 [ラオス人民民主共和国]

地球ギャラリー

写真文・堀内孝
写真家

手仕事で紡ぐ
民族の色

ナムルー村で行われていた藍染めの乾燥作業。この村に住むレンテン族の人びとは、染めと乾燥をくり返して深い藍色に染め上げる

June 2018 mundi 30



アカ族の人びとが焼畑耕作をして暮らすナムヤーン村。
ルアンナムターから車で1時間ほどの山間にある



バナナの葉を担いで山から降りてきたレンテン族の女性。
レンテン族の人びとは川のそばに住み、焼畑をして暮らす



優しい色合いが美しい、黒タイ族の人びとが染めた絹糸。
すべて草木などの天然の染料が使われている



レンテン族の女性は、綿から糸をテンポよく紡いでいく。
綿は4月に焼畑をして種をまき、9月に摘み取るという



壊れた車の部品を使って鉞を作るレンテン族の男性。
鉞の形は、男用はまっすぐで、女用は先が曲がっている



滞在中に葬儀があり、集まった親族や村人たちには
ご飯や牛ひき肉と香草を和えたラブなどの料理が振る舞われた



レンテン族の人びとが行う「生まれ変わりの儀礼」のひとつ。
日本のナマハゲにも似たキャラクターが登場する



山を歩くレンテン族の人びとにとって鉞は欠かせない道具だ。男性は鞘に入れて、女性はそのまま持ち歩くのが伝統だという



ナムルー村では、手仕事のかたわら、孫とのんびり過ごすおばあさんやおじいさんの姿をよく見かけた



ラオス北部、中国国境に近い町ルアンナムター。この町の魅力は、少数民族の素朴な暮らしと優れた手仕事が見られることだ。中でもユニークなのがレンテン族の人びとだ。郊外にある彼らの住むナムルー村を訪ねると、成人式に当たる「生まれ変わりの儀礼」が盛り上がりを見せていた。

民家の中には、竹で漉いた紙が大量に飾られた祭壇があった。祭壇の前では鬼のような面をかぶった男が踊っている。その姿はどこかナマハゲにも似ており、親近感の湧く光景だ。彼らのルーツは中国にあるといわれ、祭壇の紙にはさまざまな漢字が書かれていた。竹紙は彼らが守る伝統的な手仕事で、儀礼には欠かせないものだという。さらに目を奪われるのが、彼らの伝統衣装だ。私が初めて訪れた2000年にこの深い藍色を目にした時から、忘れられないほど印象に残っている。彼らは自ら綿を育て、糸を紡ぎ、布を織り、そして藍で何度も染めるといふ。染め上がった布は、母親が丹精込めて家族のための伝統衣装に仕立てる。

ルアンナムターに長年住み、彼らの作品を日本で紹介している谷由起子さんによれば、「彼らの布は、経糸が1センチに18本もありませぬ。こんなに織りの密度を出せる人たちは、ほかにそうはいませぬ」と、レンテン族のすば抜けた技術を評価する。谷さんの案内で、黒タイ族の人びとが住むブン村を訪ねた。彼らは民族集団が生まれたのと同じ時から機織りがあると話すほ

ど、機織りと縁が深いという。

村では黄色い糸を出す由来種の蚕を育てていた。黄金色にも見える美しい光沢の糸だ。中でも4月中旬にとれる「春の糸」が一番良いという。彼らは、この糸を草木などの天然染料で染めて布を織る。手間はかかるが、優しく柔らかな風合いはほかでは出せないものだ。村で民族衣装を着る人は減ったが、機織りの伝統は脈々と受け継がれていた。

山間にあるアカ族の人びとが住むナムヤーン村にも足を延ばした。04年に訪ねた時はまだ電気がなく、皆がろうそくで暮らしていた。既婚の女性は胸を出しているのも印象的だった。当時はアヘンを吸っている老人も普通にいたが、今は見当たらない。それでも年配の女性は、銀のアクセサリーを施した伝統的な帽子をかぶり、軒先で手の込んだ刺繍をする姿があった。男性もほうきや籠作りのほか簡単な鍛冶仕事などを行っており、手仕事は健在だった。昔ながらの手仕事が残る一方で、谷さんによると、ここ数年で少数民族の暮らしが大きく変わりつつあるという。

背景にあるのは国境を越えて進出する中国の存在だ。ルアンナムターは、中国とラオスを結ぶ主要な交易ルート上にあり、中国は着々と高速道路を整備してきた。現在では中国南部・雲南省の昆明から、ラオスの首都ビエンチャンまで道路が整備され、直通の高速バスも運行されている。ルアンナムターでも片側2車線の道路が整備され

雲南ナンバーの大型トラックが行き交うようになつた。

中国企業も続々と進出し、大規模なゴム園やバナナ園などを造った。特にゴム園は、ルアンナムター郊外に多く広がっている。こうした変化に伴い、自給自足の暮らしをしてきた少数民族の人たちはゴム園やバナナ園などへ働きに出て、現金収入を得るようになってきた。バナナ園では大量の農薬を使うため体調を崩して帰ってくる人も多いそうだが、この流れは止めようがないという。

そして「一度出稼ぎに出た女性は民族衣装を着なくなる」と谷さんは言う。確かに、レンテンの村でも今風の洋服を着た女性が見られるようになっていた。長年この土地で育まれてきた手仕事も、いずれなくなっていくのではないかと谷さんは考えている。16年の末からは、国境の町ポテンから首都ビエンチャンまでの約420キロを結ぶ高速縦貫鉄道の建設も始まり、21年には完成の予定だ。鉄道が通れば、中国資本の流入はさらに加速し、観光産業や交易活動は活発になる。少数民族の暮らしも、さらに変化していくことだろう。

堀内孝(ほりうちたかし)

1963年宮城県生まれ。P.S通信社を経てフリーの写真家になる。90年よりアフリカのマダガスカルを訪れ、人びとの暮らしや独自の進化を遂げた動植物を徹底取材。97年からベトナム、ラオス、タイなどの東南アジアにもフィールドを広げ、少数民族の暮らしと手仕事を撮影している。著書に「マダガスカルへ写真を撮りに行く」など。



左から:昔ながらの良質な材料でほうきを作るアカ族の男性。値段は1本8,000キープ(約100円)ほどだという。/銀の装飾を施した伝統的な帽子をかぶるアカ族の女性。昔は大勢見かけたが、現在は年配者に限られるようになってきた。/村を歩いていると、アカ族の女性が針仕事をする姿を見かけた。優れた刺繍は若い世代にも引き継がれているようだ。/レンテン族の先祖は中国から来たといわれる。儀礼では、長老が竹で漉いた紙につぎつぎと漢文を書き出していた